



コウノトリの 野生復帰について

研究グループ 吉田 忠史

年末25日、石川県内のため池で、8月巣立った自然繁殖コウノトリの死骸が発見され、28日三重県内で、最後の試験放鳥コウノトリ2羽のうちメス1羽の死亡が相次いで報道された。

私は10月31日、県立コウノトリの郷公園開園10周年記念行事に先立って行われた最後の試験放鳥が10時から但東町であったので、会員のF氏とYさんを誘って参加した。この日放鳥されたコウノトリは、福井で最後に捕獲された野生コウノトリ「武雄」の孫あたり、放鳥場所に居つくように3ヶ月からビオトープ水田に囲まれた大きなフライングケージで飼育していた。参加者約100名が見守る中、子供たち数人がネットを引くと、力強く羽ばたき、上空を旋回し飛び去りソフトフライングに成功した。

そして、コウノトリファンクラブ会長柳生博氏（日本野鳥の会会長）から、放鳥拠点の整備に協力いただいた地元農家の方への感謝状が贈られた。

しかし、上記の報道によると、郷公園はエサに困っていたとは考えにくいと言っているが、多くの関係者は驚いただろうし、特に最後の放鳥に参加した福井県の方々には残念だろうし、野生

コウノトリ、ハチゴロウの餓死のこともあるが、私も放鳥後移動先で死亡するとはまさかと思った。

これは、今年から始まる本格放鳥にとって、冬の餌場問題が影響すると思われる。

国内で1度絶滅したコウノトリが、兵庫県立コウノトリ郷公園が取り組む飼育繁殖で、'02年に100羽を超え、'05年から試験放鳥が始まりこれまで22羽を放ち、'07年から自然繁殖で18羽増えて、'10年1月現在35羽（回収3羽、死亡5羽）が豊岡地方で、郷公園やビオトープ水田での給餌に頼りながら野外で生息している。

今後自然放鳥が進み、国の種の保存事業であるときの放鳥も同じであるが、タンチョウのように完全自然復帰できるためには、コウノトリが自然に生息できる環境、餌場作りを人間生活と調和させることが県ならびに全国レベルの重要な課題と思う。

今年は、私たちの兵庫県支部が30周年を迎え、記念事業の企画のひとつとして、保護グループからコウノトリ・エコツアーを提案し決定しています。

ツアー日程等は未定ですが、繁殖、生息状況や観察データなどの話を聞くとともに、ハチゴロウの戸島湿地やビオトープ水田、巣台のある放鳥拠点での探鳥を検討し、次号「コウノトリ」でご案内いたしますので、会員のみなさんのご参加をお勧めいたします。